The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	コロンボのparitta儀礼 : 調査覚書
Author(s)	青木, 保
Citation	年報人間科学. 1980, 1, p. 151-171
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/5734
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

コロンボのparitta儀礼

――調査覚書――

青木　保

I

Paritta[1]儀礼の特徴は、一般的にみて次の三点にある。1、仏教徒としてのidentityの確認。2、呪術的効果。3、社会関係の確認。テラワーダ（Theravada）仏教社会にあって、仏教と社会との相互性をもっとも象徴的に示すのは、この儀礼の存在であるといってよい。聖と俗、僧院と一般社会、僧集団（sangha）と俗集団、教理と現実、ブツダと個人、宗教と呪術等々の関係が、仏教儀礼[2]の中でもっとも一般的（日常的）であり、もっとも多様な目的をもち、もっとも多く行なわれる、この儀礼を通して、はっきりと浮き上る。この儀礼行為そのものが仏教の信仰実践と同義（pinkama、あるいはthan bun）と考えられるばかりではなく、多民族・多宗教社会における仏教徒の証しを公的に表明するものでもあり、他に信仰上の徴しを特別に有しない仏教徒にとって自らのidentityの証明となる重要な機会である。この儀礼は一見単純な構造（儀礼行為としてのparittaの詠誦を中心とする）をもつものにみえるが、その日常生活に占める大きさとその効用への期待とを考えると、その分析は決して容易なものではないことがわかる。

この儀礼の特徴として3点をあげたが、それらの関連は以上にあげたさまざまな二項的関係と複雑にからみ合っている。その分析は、parittaそのものの性質の解明という難問を提出する。人類学で旧くから論議されてきたspellとprayerとの区別論議にそれが導くというだけでなく、教理と実践という二つのコンテキスト的対立の問題にそれは導びいてゆく。テキストとその解釈というだけでなく、テクキストとその実践という問題を提出するのである。テキストをコンテキストにおいてとらえるだけではすまない面が残るのが、この場合の大きな難問となる。先にあげた3点の特徴も、コンテキストとの関連においてとらえなければならない。三点は均等に重要なものではなく、個々の儀礼場面において各々の比重は異なることが容易に考えられる。

従来、テラターダ仏教の実践面での研究者はみなこの儀礼の重要

性に注目してきた。しかるに、この儀礼についてはほとんどすべての研究者が触れているにもかかわらず、その詳しく具体的な儀礼過程に関する記述はないのである[3]。その理由としては、肝心のparittaを収録し、詳しく分類する作業が困難である点と、すべてのparittaが一見同じにみえるという点でその内容の重要性に注意が向かない点とがあげられよう。さらに、その収録と検討は通常の研究者の理解の範囲をこえるということもあろう。よほどその点での理解のある専門家の協力を仰がなければ、parittaを拾い上げることは困難である。

幸い今回のコロンボ市での調査（一九七九年七月～九月）では、コロンボ大学のA. B. Dissanyake博士とGangarama寺院のKondanna師という、その点絶好の協力者を得ることが出来、数度の儀礼への参与観察とそこで収録したテープ録音のparittaの詳細な検討をすることが出来た。以下は、そうして得られたparitta儀礼に関するその儀礼過程の記述である。本稿においては、なるべく詳しくparittaの実態を示すことだけに目的がおかれている。parittaは、pali語の詠唱によるが、以下に示すすべてのテキストは直接実態調査に基ずくものであって、すべて現実に行なわれている儀礼において使用されているものである[4]。（　）内の邦訳は大意を示すこと以上のものではない。この点でも上記両氏の協力を得た。

II

今日実際に行なわれているparitta儀礼には、次の三つの種類がある[5]。

(1) sarvarātrika pirit。これはもっとも瀕繁に行なわれている形式であり、一般にpirit chantingという場合には、この形式を指すものだといってよい。夜8時半頃から翌朝6時過ぎまで続けて行なわれるものである。

(2) tun tip pāya pirit。これは二晩続けて行なわれるものであり、pirit chantingは、三十六時間程続く。

(3) sati pirit。これは一週間続けて行なわれるものである。

以上の三形式が一般に公式のものとみとめられているparitta儀礼であるが、簡略に短かくする形式も行なわれるようになってきている。varu piritとよばれるものがそれであり、その形式は、1時間程のpirit chantingを3回に分けて行なうものである。すなわち、1、夕方5時～6時、gilanpasaの前に行ない、2、翌朝6時～7時にhil dāneの前、3、その日の夕方の同時刻、という風に3回行なうのである。これは、tun tis paya piritの変形であるとも考えられる。

さらに、set piritという形もあるが、これは目的がある程度限定された場合である。「災難除け」のためであり、祝福などの行為は通常含まない。とはいっても、parittaの形式は、徐々に簡略化の方向

に向っており、またset piritはまったくparittaの詠唱のみによる儀礼であるという点からみれば、むしろparittaのエッセンスだけをとり出して行なうものであることもできる。set piritは時間的な定めはなく、午前でも午後でも行なわれるが、ながくて2時間程の儀礼である。

paritta儀礼をどういう形式で行なうかは、当時者の理由と僧侶の判断によるが、通常、(1)のケースがもっとも多く一般的であり、(2)と(3)は特殊な場合に限られる。とくに(3)はよほどの例外でなければ行なわれない。大きな危機的状況（星の衝突による大兇事が予想されたときなど）でないと行なわれない。paritta儀礼は、(1)の場合でも前後3日間はかかる。その準備も費用も決して無視できない。というのも、普通、この儀礼は金曜日の夜から行なわれることが多いが、その理由は最低一昼夜は起きていなくてはならないからで、当事者は翌日のdaneの後のパーティがおわるまで眠ることができないため、ほとんど2日間にわたって儀礼に専念しなくてはならず、金曜と土曜は起きていることになるから、日曜を休養に空けておかなくてはならない。

一例としてG寺の予定表をみると、7～9月の週末は全部このための日程で一杯にうまっていた。

ここでは、parittaのもっとも一般的な形式であるsarvarātrika piritの儀礼について、詳しくその過程を記すことにする。

この儀礼の過程は決して複雑なものではない。儀礼行為としての主要部分は、ほとんどがparittaの詠唱によって占められる。大体、次の三つの部分から構成されている。

1、pirit mandavaの設置

2、pirit

a. maha pirit

b. pirit

c. pirit panとpirit nuru

3、dāne

まず1のpirit manduvaの設置であるが、これはこの儀礼を行なう当事者の家で準備される儀礼場の設置のことである。儀礼の準備は当日の朝から家の中に（一番大きな広間）8角形の小屋を作ることからはじめられるが、この小屋のことをpirit mandavaとよぶ。この小屋には最低12人の僧が入ってpiritを誦えることができるものである必要がある。この小屋は、さまざまな文様からなる白や黄色の美しい外装を施されているが、中央に入口が設けられ、内部には中央にテーブル、それを囲んで八面に僧の坐る腰かけがおかれ、入口から入って正面にはindra kilaとよばれる柱が建てられる。この柱はarikanaの幹木にココナツとアリカナの花を結びつけ、白い衣で中心を覆ったもので、madavaから生えた樹木のような形を示す。また外側には8角形の角には油差しがおかれ、ココナツの油が入れられ油糸をおいてランプとして用いられる。

pirit mandavaの準備が出来ると、あとは僧の到着を待つだけである。

次に、参列者についてみると、儀礼を行なう目的にもよるが、そ

の範囲は必ずしも厳格な規定があるわけではなく、普通、家族全員、父方母方親族は第1イトコまでは必らず招ばれるが、それ以外の親族は当事者との親密度によって招ばれたり招ばれなかったりする。それ以外は、当事者にとっての親近度に応じて親族外の社会関係の範囲内で自由に招ぶことが出来る。仕事上の関係者、友人、知人、またしかるべき紹介があれば誰でも出席をゆるされる。そうした場合は、僧や家族・親族の紹介があれば一層よい。しかし、こうした自由な開かれた範囲のものであるということから、逆に出席者の構成は微妙な意味をおびる場合がある。エゴを中心として、父方母方の血族と親族の結合を第一に示す場であるといってよいであろう。

しかも、出席者に関しては、儀礼の過程に応じて三種類に区別する必要がある。つまりまず先に示したpirit部分における1と2、3とでは通常出席者が異なる。これも規則としてあるというよりも任意的な性格が強いが、列席者の関係の度合は一応示すものである。1は家族、親族、親しく重要な社会関係の範囲の人々が参列し、当事者と儀礼の目的とかかわりのある人々の集合である。2、3は家族、それに親族の中でもごく親しい者、社会関係の範囲では特別の関係にあるものに限られる。しかし、両者ともに任意性が強く、規則的なものとはいえない。次に第3の種類として、翌日のdaneの部分の出席者は両者に加えて主として社会関係の中から場合に応じて広い範囲の人々が招ばれる。dāneに引き続くパーティは、社会交流の場として重要な機会を提供する。全体的にみて出席者は制限的であるよりも開放的であって、原則としてはごく内的な集合ではあっても参加者は外的に開かれていて、多い方がよいとされる。儀礼参加者に関するこの開放性は、この儀礼の特徴である。

さて、儀礼の準備が整い、参加者が集まると、僧の到着を待つ。時間的には、夜の8時半頃となる。僧の数は大体12名は必要である。僧の構成は、一寺院からとは限らない。所属寺院（檀家制でなく個人・家族と寺院とのかなり任意の結びつきを基礎にしている）の寺院長を主導僧に仰ぐが、参加僧のメンバーは寺院側の事情によって選ばれる。いくつかの寺院からの僧でメンバーが構成される場合もあれば、一寺院からだけの場合もあり、この構成メンバーは特別の意味をもたないのが一般である。

僧が到着すると、玄関の前で当主と列席者が迎えるが、そのとき三人のドラマーと1人の笛吹きがドラムと笛を激しく叩き鳴らす。この大音響の中を僧は屋内へ入り、pirit mandavaに入る。ドラマーたちは僧がその中に入るまで楽器を叩き鳴らしながらついてきて、僧が中に入ってしかるべく位置をしめるまで入口の前に並んで続ける。僧は主導僧を先頭に入ってくるが、それに続く三人の僧侶が三種の聖物を一つずつもって入場する。三種の聖物とは、1、dhatu karanduva（ブツダの聖遺物。ブツダの骨、歯、髪、爪を象徴するものとされる石の断片を金製の器物に入れたもの。）、2、pirit nuru（細い白糸を束ね合せて作ったヒモ、呪護糸）、3、pirit pot（聖典の記してある木葉版）である。僧はpirit mandavaの中へ入ると、中央のテーブル（白いテーブル掛けがかけてある）の上に、pirit panとよばれる銅製の水入れをおく。その中にはココナツの花malvatiaya

を浮かした水が入っている。それから持参したpirit nuruをほどき、天井に張りめぐらし、mandavaの入口の両脇から外へ出す。pirit muruはdhatu karandura に結びつけられてある。そのあと、malaを行なう。これは、まず両手をライムの液で洗い浄め、五大要素といわれるabba（マスタード）、ethana（樹液）、vilanda（パディ・パフ）、sumusahal（小粒の米）、samanpicha（ジャスミンの花）を掌の上でこね合わせ、それをテーブルの上と床にばらまく。

そこで、8角形の外側においてあるランプに灯がともされる。列席者は全員pirit mandavaの前に集まって坐る。

ここで僧に対するgilanpasaが行なわれる。飲物（大低は紅茶）を僧は受けとると、短かいsuttaを誦える。これはdaneの後で、そのpinをつむ行為への感謝を表明するものである。厳密にいうと、これはmaha parittaには属さないが、その導入部の始まりを告げる。このsuttaはpunnya anumodanaに属するものである。

Icitan patthitan tuyham khippan eva samijjatu
Sabbe pūrentu attasamkappā cando panarasi yathā
（人々の願いと望みがすみやかにかなえられんことを。皆さんの自分自身に対する願いが満月のごとくなしとげられるように。）

場合によっては、punnya anumodanaのsinhalese語文pinvakyaを続けて詠唱する。そして、飲物をのむ。飲みおわったところで、儀礼の請願者である家の当主が、dhatu vathiya（キンマ類、僧が口に入れて噛むもの）を盆にのせて主導僧に手渡し捧げる。この行為が、この儀礼場でparittaを請願することを示す象徴的行為とみなされている。

dhatu vathiyaを受けとると、主導僧による説教が行なわれる。parittaの儀礼の目的とその効用についての仏教上の意味ずけについての説明とここに当主とその家族がそれを請願し実行したことのpinkamaとしての意義を説く。pinを得ることの重要性について語り、その行為を讃える。場合によって異なるが、この説教は20分～40分位のものである。

説教がおわると、pirit nuruがpirit mandavaから引き出されて参列者全員の手を通すようにのばされる。人々は床の上に坐ってpirit nuruを掌でつかんで合掌し、互いに結ばれ、またはpirit mandava内のブッダの遺物と結びつけられ、さらに僧侶が一方の端をもつことから僧侶とも結びつけられる。

pirit nuruが行き渡ると、主導僧の先導によって、pan silがはじまる。

pan silとはpanca silaすなわち五戒のことで、仏教徒が守るべきもっとも基本的な戒律のことである。テラワーダ仏教圏ではあらゆる仏教儀礼は、このpanca silaを授ける授戒の儀式をもってはじめられるといってよいのである。

先導僧がブッダになり替ってこの戒律を人々に授ける仏教史上の「原初の風景」の繰り返えしとして、この儀礼行為は行なわれ、まさにそれは仏教徒であることの表明として行なわれるものといってよい。

まずブッダへの崇敬の念を表明するが、これはいかなるときでも

儀礼的場面の初めに誦えられるブッダへの帰依を申し出る言葉であり、この言葉なくしてはいかなる仏教儀礼も行なわれることはない。

Namo tassa bhagavato arahato samma sumbudtassa

（祝福されし者、至上の存在、全たき悟達に達した者を讃える）

このNamo tassaは3回続けて誦えられる。先導僧のあとを当主が続けて誦える。この初まりからpan silは俗人である当主の信仰表明（全参加者を代表するものである）として行なわれるわけであるから、主導僧＝ブッダの授戒の言葉に続けて和すことが要求される。

pan silはNamo tassaと次に続くTi-saranaとpanca silaの三つの部分からなり立っている。そこで、次にTi-saranaが同じ形で誦えられる。Ti-saranaとは、いわゆる三宝のことで、ブッダ、ダンマ、サンガの三つを拠り所として生きてゆくという信仰表明である。

Buddhan saranam gachāmi

Dhamman saranam gachāmi

Sanghan saranam gachāmi

これも三誦であるが、2回目は各節の前にDutiyampiを、3回目はTatiyampiをつけて誦える。

（私はブッダの庇護の下に生きてゆきます。私はダンマの庇護の下に生きてゆきます。私はサンガの庇護の下に生きてゆきます。）

Ti-saranaがおわると、panca silaがはじまる。これも主導僧に当主が続くという同じ形で誦えられる。

Pāṇati-pāta veramani sikkha padam samadiyami

Adinā-dāna veramani sikkha padam samadiyami

Kāmesu micchā-cārāveramani sikkha padam samadiyami

Musavada veramani sikkha padam samadiyami

Sura meraya-majja-parma-datthana veramani sikkha padam samadiyami

（殺さない、盗まない、犯さない、嘘をつかない、酒類を飲まない、の五戒）

pan silがおわると、主導僧に選ばれた僧の一人（三番目に位置する場合が多い）が、Devata Aradanaを誦える。これはdeva（神々）をこの儀礼場に招請し、その守護を求めるものである。ここからpirit（護る）儀礼としての性格が、僧の独特の詠唱法によって浮かび上ってくる。まず次の請願を僧が俗人のために行なう。

Vipatti pati bāhāya

Sabba sampati siddhiya

Sabba dukkha vināsāyā

Parittam brūhta mangalam

（以上を誦えたあと、全員の詠唱となって2回誦える。ただし、2回目は最後の2節を次のように変える。）

Sabba bhaya vināsāyā

Parittam brūhta mangalam

また3回目は次のように変える。

Sabba roga vināsāyā

Parittam brūhta mangalam

以上の pirit の大意は、次の通りである。(すべての災いと不幸をなくし、繁栄をもたらすために、またすべての苦しみをなくすために、どうか pirit を誦えて下さい。すべての恐れを取り除くために、pirit を誦えて下さい。)

このあと、dēvata aradana の本文に移る。

samanta chakkawalesa
attra Gachchanta devata
saddhammam munirajassa
sunantu sagga mokkhadan

dhammassawana kalo ayam bhadanta(このフレーズは三回繰り返えす)

(この宇宙に棲むすべての神々は、ブッダの言葉を聴くためによばれる。その言葉を聴くことによって、天とニルヴァーナへと導かれる。)

こうして神々をこの儀礼の場へ招きよせて守護してもらうための devata aradana がおわると、次に新たに帰依の表明が行なわれる。

Namo tassa……(三誦)

この後、ブッダ、ダンマ、サンガへの崇敬が表明される。このフレーズもよく用いられる。

Tiratananosararapatha (三宝に対する崇敬)

Iti pi so Bhagava Arahasan Samma sombuddho vija caran-a-sampanno
Sugato Lokavidu Anuttaro
Purisa damma-sarati Sattha Deva-manusanam
Buddho Bhagava ti

Swakkato Bhagavata Dhammo Sanditthiko
Akaliko Ehipassiko Opanayiko
Paccattam veditabbo vinnuhi ti

Supatipanno Bhagavato savaka sangho
Ujupatipanno Bhagarato savaka sangho
Naya patipanno Bhagavato savaka sangho
Samici patipanno Bhagavato savaka sangho
Yadidam cattari purisa yugani Attha purisa puggala
Esa Bhagavato savaka sangho
Ahuneyyo Dahunneyo Dakkhineyo Anjali kardniyo
Anuttaram punna-khettam Lokassa ti

(祝福されし者、高貴の者、知と美徳に恵まれし者、世界の知者、教えにおける比類ない実践者、神々と人との師、悟達した聖なる者を讃めたたえて。)

次に、Jayamangala Gatha を誦える。この Gatha は、ブッダが宿

敵（マーラその他）との戦いにおいて勝利したことを謳う祝福文である。この Gatha は祝福すべき場合に多く用いられるもので、九部からなる。

1′ Bahum sahassa mabbi nimmita sayu dhantam
Giri mekhalam udita ghora sasena maram Danadi dnamma vighina jitava Munindo
Tam tejasa bhavatume jaya mangalani

2′ Marati reka mabi yujjhita sabba rattim Ghoram pana-l avgka makkha mathaddha yakkham
Khanti sudanta ridhina jitara Munindo
Tam tejasa bhavatume jaya mangalani

3′ Nalagirim gaja varam ati matta bhutam
Davaggi cakka masaniva su darunantam
Mettambu seka vidhina jitava Monindo
Tam tejasa bhavatume jaya mangalani

4′ Ukkhita khagga mati hattha sudarunantam
Dharanti yojana pathan gulimala rantam
Iddhibbi sankhata mano jitavara Munindo
Tam tejasa bhavatume jaya mangalani

5′ Katrana katha mudaram iva gabbhi niya
Cincaya duttha racanam janakaya majjhe
Santena soma vidhina jitava Munindo Tam tejasa bhavatume jaya mangalani

6′ Saccam vihaya mati saccaka vada ketum
Vada-bhivopita manam ati andhabhutam
Panna padipa jalito jitava Munindo
Tam tejasa bhavatume jaya mangelani

7′ Nando-panannda bhujagam vibudham mahiddhim
Puttena thera bhujagene damapayanto
Iddhupadesa vidhina jitdva Munindo
Tam tejasa bhavatume jaya mangalani

8′ Duggaha ditthi bhujagena sudattha hattham
Brahmam visuddhi juti middhi baka bhidanam
Nana gadena vidhina jitara Munindo
Tam tejasa bhavatume jaya mangalani

9′ Etapi Buddha jaya mangala attha gatha
Yo vacako dina dine sarate matandi
Hitvana neka vividhani c'upaddavani
Mokkham sukham adhi gameyya naro sapanno

（1′数千の部下の手に武器をもたせ、どう猛な象の Girimekhala に坐するのはマーラ。それに対するは、哲人の王、慈愛と有徳で打ち負かす。その徳のおかげで、喜ばしき勝利がわれらのものとならんことを。

2、マーラよりもさらに凶暴なるは度しがたく性悪な悪霊アラワカ。アラワカはブッダと一晩中戦った。彼に対して哲人の王は忍耐と自制心とで打ち負した。その徳のおかげで喜ばしき勝利がわれらのものとならんことを。

3、象王ナラギリは酔っ払っていた。山火事のごとく燃え上り、雷のごとく手に負えなかった。慈愛の水をふりかけることによって、哲人の王はこの怪物を打ち負した。その徳のおかげで喜ばしき勝利がわれらのものとならんことを。

4、剣をふり上げて邪悪なるアングリマーラは迫ってきた。哲人の王は心の力でそれを打ち負した。その徳のおかげで喜ばしき勝利がわれらのものにならんことを。

5、その胴には鉄棒の束がまかれて妊婦シンチャの大きさにみせかけていた。荒々しい言葉とともに集会の真只中で狂った怒叫をひびかせていた。哲人の王は静かな優しい話し方でそれを黙らせた。その徳のおかげで喜ばしき勝利がわれらのものとならんことを。

6、傲慢なサッチャカは真理をあざけり、矛盾の権化のようだった。彼の考え方は彼自身の議論によって盲にされていた。知のランプに灯をともすことによって、哲人の王は彼をさとした。その徳のおかげで喜ばしき勝利がわれらのものとならんことを。

7、賢く力強い蛇ナンドナンダ、高貴なる哲人は心の力によってその弟子たる息子テーラ・マッガラーナを通して彼を心服せしめた。その徳のおかげで喜ばしき勝利がわれらのものにならんことを。

8、純粋で光り輝やくすばらしきブラーマン名前をバーカという。彼の手は恐ろしき毒蛇にかまれた。哲人の王は知の薬によってこれを治した。その徳のおけげで喜ばしき勝利がわれらのものとならんことを。

9、賢こい者よ、ブッダの喜ばしき勝利についてのこの八種の経文を日毎誦え、熱心に想い起せば、さまざまな不安を逃れ、ニッバーナの輝きに達することができるであろう。)

以上のJayamangala Gathaの詠誦のあと、二つの短かい経句が誦られれる。いずれも祝福と守護のためのものである。

Bhavatu sabbamangalam
Rakkhantu sabbadevata
Sabbabuddhanubhavena sada sotthi bhavatu te
Bhavatu sabbamangalam
Rakkhantu sabbadevata sabbasanghanubhbvena Sada sotthi bhavatu te

(すべての祝福があたえられんことを、すべての神々が守ってくれるように、すべてのブッダの力によって安全でいることができますように。すべての祝福があたえられんことを、すべての神々が守ってくれるように、すべてのダンマの力によって安全でいることができますように。すべての祝福があたえられん

ことを。すべての神々が守ってくれますように、すべてのサンガの力によって安全でいられるように。）

これはSumangela Gagathaの一節である。

このあと、引き続いて次の短かい経文が詠誦される。三回繰り返えす。

Nakkhatta yakkha Bhutanam
Papagaha nivarana
Parittassanubhavena Hontu tesam upaaddawe .

（このパリッタの詠誦の力によって、星々の運行の影響が取り除かれんことを。）

ここまでのparittaについて詳しく紹介したのは、ほとんどのものが儀礼の場での慣行として行なわれているものであり、テキストにはのっていないものが多いからである。Jayamangala Gathaなどを除くと、まず慣行上の経句ばかりであって、これを誦える僧たちも、テープにとったものを再現してはじめてこのようなものも用いられたのかと知るぐらいであった。その点以下の有名なparittaについてはテキストがある。

III

ここまでmaha pirit の導入部がおわる。次にMangul bera wadanaya、つまりsabda pujaが同じドラムと笛によって行なわれる。sabda pujaがおわると、maha piritがはじまる。この部分にこの儀礼における中心部分のparittaが誦えられるわけだが、それは通常次の三つのsuttaから構成されている。

1、Mangala sutta
2、Ratana sutta
3、Metta sutta

1のMangala suttaは、真の祝福とは何かについて教えるもので、ブッダが神々に説いたものだといわれている。

2のRatana suttaはブッダが三宝の意義を説いたもの。3のMetta suttaは慈愛の意味についてブッダの教えである。いずれもparittaとして重要なものであるばかりでなく、テラワーダ仏教の中核をなす教えを象徴するものにほかならない。しかも、これらのsuttaはブッダ自身の言葉の直接の繰り返しと想定されている。これらのsuttaを誦える僧たちは、そのとき、ブッダその人の化身として「語る」のである。

ここでは、いずれもかなり長いsuttaであり、しかもテキストが知られるものでもあるので、Mangala suttaだけを詳しく記すことにする。儀礼は必ずしもテキスト通りに行なわれるわけではない。piritについても、いわゆるbanaの典拠であるcatubhanavaraには記されていないものが実際には数多く誦えられている。出来るだけそうした種類のものをとりこぼさないように収録したわけであり、ここれまでの研究はこの点に関してほとんど注意を向けていない。むしろテキストにないpiritの方が強い意味をもつ場合があり、テープを録音を中心にその収録を行なったことは今回の調査の大きな成果である

と考える。

Mangala sutta

Evam me sutam:
Ekam samayam bhagava
Savatthiyam viharati Jetavagne
Anantha - pindikassaarane
Atha kho annatara devata
Abhikkantaya rattiya abhikanta vanna
Kerala kappam Jetavanam - kami
Upasam Kamitva bhagavgntam
Abhivadetva ekamantam atthasi
Ekamantam thita kho sa devata
Bhagarantam gathaya ajjhabhasi :

以上は導入句

（このようにわれらは聞いた。あるとき、祝福されし者はサワッテイ近くのジェッタの森の僧院に住まわれていた。夜もふけた頃、ある神が来てジェッタの森全体を輝やかしめたが、祝福されし者の前に来て近くにひざまづき崇敬の念をこめて拝礼し、それから傍らに立つと祝福されし者に敬々しく申し出た。）

1′ Bahu deva manussaca
Mangalani acintayum
Akankha - mana sotthanam
Bruni mangala muttamam:

2′ Asevana ca balanam
Panditanam ca sevana
Puja ca puja - niyanam
Etam mangala muttam

3′ Patirupa - desa vasoca
Pubbe ca kata - punnta
Atta samma panidhica
Etam mangala muttamam

4′ Bahu saccanca sip panca
Vinayo ca susikkhi to
Subhasita ca ya vaca
Etam mangala muttamam

5′ Mata pitu uppatthanam
Putta darassa sangaho
Anakula ca kammanta

Etam mangala muttamam

6、Danam caddhamma-cariya ca
Natakananca sangahoi
Anawajjani kammani Etam mangala muttamam

7、Arati wirati papa
Majja-pana ca sannamoi
Appa-mado ca dhammesu
Etam mangala muttamam

8、Garawo ca niwato ca
Santu thi ca katan nuta
Kalena dhamma sawanam
Etam mangala muttanam

9、Khanti ca sowacas sata
Samana nanca dassanam
Kalena dhamma sakaccha
Etam mangala muttam

10、Tapo ca brahma ca riyanca
Ariya saccana dass anam
Nibbana sacchi kiriyaca
Etam mangala muttamam

11、Putthassa Loka dnammehi
Cittam yassa na kampati
Asokam wirajam khemam
Etam mangala muttaamam

12、Eta-disani katvana
Sabbattha maparajita
Sabbattha sotthim gacchanti
Tam tesam mangala-muttamam

（1、善なるものを追い求める多くの神々と人間は、祝福について考えてきました。どうか、もっともすばらしい至高の祝福について教えて下さい。〔ブッダ〕2、愚者と結びつくな、賢者と結びつけ。讃めたたえるべき者を讃めたたえよ。これこそ至高至上の祝福である。3、正しい場所に住まい、過去に慈愛のある行ないをし、正しい位置に自らをおくこと。これこそ至高至上の祝福である。4、広く学び、完全なものを作り、よく鍛え上げた教理に徹し、正しく喜ばしい言葉をもって語ること。これこそ至高至上の祝福である。5、父と母を支え、妻と子供を養い、和やかに仕事をすること。これこそ至高至上の祝福である。6、寛容であること、正しい行ない、親類を助け、非難される

ことのない行動をすること。これこそ至高至上の祝福である。7、悪しきことを止めそれから身を退くこと、陶酔を禁じ、徳をつむこと。これこそ至高至上の祝福である。8、敬意、謙譲、充実、感謝、そしてダンマに聴き入ること。これこそ至高至上の祝福である。9、忍耐、従順、Samana（禁欲者）を拝むこと、そして信仰について話し合うこと。これこそ至高至上の祝福である。10、自制、聖なる生活、真理の受容、ニッバーナの実現。これこそ至高至上の祝福である。11、世欲的な物事と接しても侵されない心の持主。つまり憂いなく潔白でありそして安定していること。これこそ至高至上の祝福である。12、このようなことを守ること。いずこにあっても敗れることなく、どのようにしていようと幸福に生きられる。これこそ至高至上の祝福である。）

Mangala, Ratana, Metta の三大 sutta の詠誦がおわると、次に短かい二つの経文が続く。

1、Yamdumnimittam awamangalamcha
Yocha manapo sakunassa saddo
Papaggaho dassupin am akantam
Buddhanubhawena winasamentu

2、（最後のフレーズだけ次のように変える。）Dhammanubhawena winasamentu

3、（同じく）Sanghanubhawena winasamentu

（1、ブッダの力によって、邪悪な呪い、邪視、邪まな出来事、邪まな想念を喚びさます鳥の啼声、悪癖をもたらす植物などの影響が消滅させられ取り除かれんことを。2、ダンマの力によって（以下同上）。3、サンガの力によって（以下同上）。）

これに続けて以下の経文の詠誦。

Dukkhappatta cha niddukkha
Bhayappata cha nibbhaya
Sokappatta cha nissoka
Hontu sabbepi panino

（苦しむ者に救いを。怖れる者に救いを。悩む者に救いを。生ける者みなに救いあれ。）

次に以下の経文を3回誦える。

Sabbe buddha balappatta
Pachchekanamchayambalam
Arahantanamcha tejena
Rakkham bandami sabbaso

（すべてのブッダとアラハンの力によって、すべての生ける者は守護されんことを。）

この3誦をもって、maha pirit は終了する。再びドラミングと笛が鳴らされ、この sabda puja の中に、2人の僧をあとに残して、主

導僧以下他の僧は全員引き上げてゆく。

このあと、2人の僧によるpiritが続けられるが、通常のparitta儀礼においては、ここまでが儀礼の主要部分であって、参列者も当主とごく内輪の者を除く大部分が僧が去ったあと帰宅するか、個室に退く。大体、11時半頃迄にmaha piritは終了する。普通は、みなが帰る前に夜食が供される。儀礼のもっとも厳粛な部分が過ぎてほっとした雰囲気が漂うのである。

さて、2人の僧によるpiritは朝まで続けられるが、約2時間交代でこの2人の僧は他の2人の僧と入れ替る。

他の僧が去ったあと、2人の僧は再び儀礼過程を繰り返えす。次の過程はpiritをはじめるに当って必らず繰り返えされる。

1、Namo tassa …（3回）

2、Buddham saranan …。

3、Ata sil（これは8戒。pan silにさらに3戒を付け加える。その3戒とは、6、Vikala-bhojana veramani sikkhapadam ——なお、ここにおけるAta silの場合、誦えるのは各節sikkhapadamまで。samadiyamiは誦えない。7、Nacca-gita-vadita visuka dassana mala gandha ——vilepana dharanamandana vibhusanatthana veramani sikkhapadam。8、Ucca sayana maha sayana veramani sikkhapadam。6、適当な時間以外に食事をしない。7、踊り、唄、音楽、見世物、陶酔をさそうものなどにかかわらない。8、高い柔らかい席や寝具を用いない。）

このあと、piritがはじまるが、これは4部（Banawara）に分れていて、午後11時半過ぎから翌朝6時過ぎまで続けられる。

まず第1のbanawaraは、16の経文によって構成されている。以下経文名だけをあげる。

1、Namas karaya

2、Saranagamanaya

3、Samanera prashnaya

4、Dwaattinsakaraya

5、Dratyawekshawa

6、Dasadhamma sutraya

7、Mahamangala suttraya

8、Ratana suttraya

9、Metta suttraya

10、Khanda paritta

11、Mettanisansa sutta

12、Mittani sansa sutta

13、Moraparitta sutta

14、Chanda paritta

15、Suriyara paritta

16、Dajagga paritta

これで第1のbanawaraは終わる。次に第2のbanawaraに移るが、僧が交代する場合もある。

第2のbanawaraは、5部から構成されている。

1、Maha kassapa thera bojjanga
2、Maha moggalana thera bojjanga
3、Maha chunda thera bojjanga
4、Girimananda sutta
5、Isigiri sutta

これで第2部は終了する。大抵はここで2人の僧は次の2人に交代する。再びsabda pujaが行なわれる。

第3部はドラムと笛の音とともにはじめられる。この部はsutta desanaといわれ、ブッダの最初の説教を繰り返えす特別のbanawaraであって、人々は緊張しながら聴く。これは8部から構成されている。

1、Dharmmachakkappawattana sutta
2、Mahasammaya sutta
3、Alawaka sutta
4、Kasle bharadwaja sutta
5、Parabhawa sutta
6、Wasala suttraya
7、Sachchawibhanga sutta

ここまでの部分は2人の僧で行なうが、ここでさらに2人の僧が加わり、4人で以下の部分を詠誦する。これをHamaraという。

8、Atanatiya sutta（このsuttaの第1部だけ）。

これで第3部は終了する。大体午前3時半頃になっている。

第4部はAtanatiya suttaの残りを全部誦む。第4部も4人の僧で行なう。これが終了するのが、大体、午前6時頃である。第4部が終了すると、4人の僧は再び以下のsuttaを詠誦する。punna anumodanaのはじまりである。

1、Maha pirita（これは、Mangala, Ratana, Mettaのさわりの部分だけを短かく誦える。）
2、Pan sil
3、Pinvakya

ここで再びmangul beraが行なわれる。ドラムと笛の間に、4人の僧は水を用意し、pirit nuruを巻き戻してから短かく切って人の手首に巻きつけるぐらいの長さにそろえる。Mangul beraが終わると、pirit panとpirit nuruが行なわれる。

Pirit panは用意した水を、僧が人々に各々かける。人々はpirit mandavaの前に進み出て、両手を合せてその上に僧がかける水を受けそれを顔にかける。このとき僧は次の経文を誦える。

Sabbitiyo vivajjantu Sabbarogo vinassatu（すべての苦痛はいやされ、すべての病いは治される。）

次に僧は短かく切ったpirit nuruをこれまた進み出た人々の各々右手首に巻きつける。このときには、次の経文を誦える。Sabbe buddha ba lappata Pachchekanamcha yambalam（すべてのブッダとアラハンの力によってすべての生ける者は守護されんことを。）

pirit panとpirit nuruが終わると、これでPunnya Anumodanaを含めてpiritはすべて終了したことになる。再び激しいドラムと笛

の mangul bera の中を4人の僧は持ってきた聖遺物その他をもって帰ってゆく。これで散会となるが、あと午前11時頃から dane が行なわれる。dane とは僧の労をねぎらってする捧げ物のことで、食事と贈物をさし上げる。人々はそれまで休む。11時になると、前夜 maha pirit のあとで帰った人々も再び集まり、またその他友人なども大勢集まって、一種の社交パーティとなる。僧の人数は前夜と同じ数の場合もあれば若干増える場合もある。

僧の到着は mangul bera を必ず伴なう。今度は pirit mandava の中でなく、その前に座がしつらえてあり、そこに僧は座る。

食事の前に僧が行なうのは、まず主導僧による短かい説教。Sangiya といって僧へ捧げ物をすることの意義を説く。

次に、Iccitan patthitan（前出）……を誦える。そのあと一人の僧（誰でもよい。主導僧の指名による。）が pinvakya を誦える。これが終わると、食事が供される。

食事後、短かい説教。この説教は今回の Paritta 儀礼全体の意義を説く。説教が終わると、当主が水を水差しから皿へ注ぐ。これは死者への供養のためである。その間、僧たちは、次の経文を詠誦する。

Idam me natinam hotu Sukhita hontu natayo.（これが、「徳の転送」といわれるものである。意味は、この徳（pin）がわれらの死せる親類に送られ、彼らが幸せでいることができるように、というものである。）

この死者への「徳の転送」が終ると、abiwadana という僧への日用品の贈物が捧げられ、それを受けとった僧たちは、再び mangul bera の中を僧院へと引き上げてゆく。

これで sarvaratrika pirit は終了する。このあと、人々は食事をし歓談の時を過ごす。これはもっとも正統な社交の場であり、儀礼の厳粛の後の安らいだ落着きの中で和やかな社交が繰り広げられてゆく。午後の3時には dane のパーティも終了する。

Ⅳ

さて、以上の paritta 儀礼であるが、仏教と社会の相互性を象徴する形式としてその社会的性格の分析も当然のことながら重要であり、それは別稿で行なう予定であるが、今後の人類学的分析のために、一つの点だけを指摘しておきたい。すなわち、この儀礼には、参加者（僧と俗人）の側に二つの目的がその効用をめぐって存在するのがみられる。それは、ここに詳しく紹介した pirit の内容をみてもわかるように、僧の誦える pirit 自体はブッダの教えの繰り返えしであり、まさに聖典に忠実であって、合理の道を説く宗教の目標に沿ったものである。そこには宗教目的の追求上における何ら非合理的なものは含まれていない。しかるに、それを聴く人々の願いは、魔除け、厄除けから生活の安寧、死者への徳の転送、病気治し、旅の安全などすべて呪術的非合理的なものとかかわっている。pirit はその点呪術的効果があるものと信じられ、その内容とその効果とは大幅にくいちがって受けとられている。聖と俗とのダイコトミーとしてこのくいちがいにみられる二つの目的をとらえるとすると、儀礼の効用という点からみて、どのように pirit の力をとらえたらよいであろうか。その点、Frazer や Durkheim 以来の儀礼の効用に関す

目ざましく活況を呈している研究分野である。この研究状況については、すでに他所で触れたことでもあるので繰り返さないが、とくに一九七〇年代に入ってから仏教研究は人類学的アプローチを加えて新らしい段階に入ったといってもよい。（青木、1978）世紀末から今世期初頭の仏教学の確立・発展期に比して、仏教研究は第二の黄金時代を迎えたという評すらみられる。仮りにこの評言を受け入れるならば、現在の第二期の特徴は、人類学的ということができる。

数年前、筆者はオクスフォードでR・ゴムブリッヂと雑談の折に、「仏教人類学 Anthropology of Buddhism」(AOKI, 1978)という研究分野が可能となったといい、彼の同意を受けたが、国際学会だけでなく、わが国の人類学会にあってもこのテーマデシンポジウムが開かれるような状況にもなっている。ただし、このシンポジウムは仮りにも「仏教人類学」的とはいいがたいものであった。しかし、研究動向としては注目すべき展開といわねばならない。

仏教人類学という用語をいま仮りに用いるとして、その研究の特色を求めるとすれば、まず次の二点が考えられる。

1、仏教の教義（聖典 canon）の研究ではなく実践面の実態研究。

2、仏教と文化、仏教と社会の相互関係の中で仏教をとらえる視点から研究すること。

従来、人類学における宗教研究はいわゆる未開宗教 primitive religion に局限されてきた。仏教などの高等宗教は人類学の研究枠組の中に入らないものという暗黙の前提があった。しかるに、今日ではむしろ未開宗教研究の枠組でもって文明宗教をとらえなおすという試みが積極的になされている。また高等宗教で

注

1、〔付記〕の3を参照のこと。

2、〔付記〕の2を参照のこと。

3、例えば、実践面の仏教も含めて研究したパーリ学、サンスクリット学のGombrichも、「私はいくつかのpirit儀礼に出席した。」

たが、pirit の記述はすでになされているので、私は自分のデータを用いて触れるだけにしよう。」

(Gombrich, 1971, p.205) といっているが、ここで彼が記述として示すのは Yalman (1964) であり、Yalmana この論文には具体的な paritta の記述はほとんどないのである。Gombrich もその具体的な記述を行なっていない。

4、テキストの参照としては、Manamakut から出ているものと sri dhammananda のものを用いたが、ここに示した実際に用いられる多くの parittaはこの二つには示されていない。

5、Gombrich, p.203

〔付記〕

1、仏教の人類学的研究は、今日東南アジア研究の中でももっとも

あっても、その現実における動態はさまざまであり、大宗教の中に多くの未開宗教的な面が指摘でき、いわば信仰実践の面からアプローチすることによって、文化における科学的思考と象徴的思考の二重構造がみられるのと同じように、宗教においても二重性がみられることが明らかとなった。現在の状況は人類学が未開社会研究によって鍛練してきた方法と概念を用いて文明社会へアプローチする必要をむしろ要求する傾向さえみられるのである。

2、以上のような点からみて、仏教人類学的研究のテーマとしてさまざまな問題が考えられるものの、なかでももっとも重要かつ人類学的なアプローチが有効なテーマは、儀礼面の研究である。儀礼が神話と現実とを媒介し、また理念と実際とを結びつけるものであることはよく指摘されるが、仏教においても儀礼は教理と現実を結びつけ、見えない教えを見えるものへと具現化する最大の手段であり、しかもそこには仏教と社会・文化との相互作用が明確に浮かびあがるのである。

しかし、仏教は本来儀礼を否定したところに成立した宗教であり、仏教儀礼という言葉は一種の語義予盾といってもよい。ゴムブリッチがいうごとく、「聖典上の仏教は、個人のための宗教であって、僧侶のための僅かな儀式を除けば、いかなる儀礼も定めずまた含まない。」だが、東南アジア（ここではスリランカを加えて、タイ、ビルマ、ラオス、カンボジヤの仏教諸国）のテラワーダ仏教社会にあっては、仏教儀礼はほとんど仏教と同義的な意味をもつものといってよいのである。

僧の義務の大半を占めるのは、何らかの形での儀礼の執行者としての役割であり、また社会もそれを必要とする。これらの社会においては、人は誕生から死にいたるまで生活の節目に仏教儀礼から切り離されるということはない。各々の通過儀礼にはたとえ全面的というのではなくとも（結婚式にみられるがごとく）、僧による儀礼は不可欠の部分として組みこまれている。さらに危機の儀礼においても仏教儀礼の形をとる場合が多い。

こうした儀礼の存在にみられるように、教義上の否定と、現実における大きな役割と、この二律背反的な性格の中で、リーチのいう実践宗教（Practical Religion）としての仏教は存在しており、その存在形態は常に矛盾をはらんでいる。この矛盾ないし二律背反性は、信仰の枠組の中では決して対立し葛藤しあうものとはなっていない。むしろ両者は仏教が根を下ろした各々の文化の形と融合して、仏教と文化との両立性、あるいは構造的均衡を生み出している。仏教儀礼はこの両立性ないし均衡の表徴とみなすことができる。

さて、仏教はヒンドゥー・バラモン教的理念枠組をとり払って、カールマを集団の属性から個人の属性へと転化せしめ、救済宗教として出現した個人のための宗教であるが、もとより宗教として社会的な公共の場を無視してきたわけではない。仏教が広く布教され国教とさえなった背景には、その社会的な広がりを可能とする要素があったことは事実である。しかし、本来的にブッダその人の話した教え（ダンマ）を語り継いで後代に伝えてゆく禁欲（タパス）者による「語りべ」戒律集団としてのサンガには、アシュラマにこもって修行に徹する反俗的な性格が強く存在する。それ故、仏教改革はタイのタマユット派やブッダーサ派のごとく、常により戒律を厳しくし自らをより孤立化させよ

うとする形をとるのである。この孤立への傾向と社会への布教とは相矛盾する。事実、仏教寺院は社会の中心に位置し、サンガと一般社会との交流は盛んである。この矛盾はテラワーダのサンガの性格を一種中立的なものとするのに役立っている。

しかるに、このようなサンガではあっても、社会的な行為として一般に二つの行為が古来みとめられてきている。すなわち、僧の托鉢と布施の行為と一般人のための読経・説教の二つであり、これらはいずれも直接俗人と交わる場において、つまり公共の場において行なわれる行為であって、戒律にしばられたサンガが生きてゆくための最少限必要な行為であるとともに互恵的な（reciprocal）関係を俗世間との間に結ぶ行為なのである。スリランカでは、これを（pinkama）とよぶ。pinkama とは、「徳をつむための行為」を意味するが、今日では何らかの形での社会＝公共的な仏教上の行為はすべて pinkama とよばれる。pinkama は通常二つの行為を含む。dane と bana である。dane とは「与える」ことを意味するが、僧に食物を施すことを一般に指す。bana とは説教のことであるが、これには後で述べる paritta が含まれる。dana と bana とはともにスリランカの仏教徒の間ではごく日常的な出来事に属する。dane には三つの区別があり、hil dane は朝食（午前7時頃）、daval dane は昼食（僧はこの二回だけ食事をとる。午前11時半頃）そして、gilampasa dane、これは夕方5～6時の間に行なわれるもので飲み物だけの dane である。コロンボの寺院では、dane は信者のもちまわり義務とされているところが多い。しかし、dane は適当な時間であれば誰が行なおうと構わない。とくに、夕方の gilampasa には主要寺院は dane をする人で一杯になる。dane と bana は儀礼行為としては普通組み合せセットとして行なわれる。gilampasa においても、dane のあと必らず bana が行なわれる。bana は大部分が paritta として行なわれる。

3、paritta とは保護・守護を意味するパーリ語であり、シンハリ語では pirit（タイ語では paarit）というが、通常 paritta とは一群の聖典に基ずく sutta, gatha を読経・詠唱することを指す言葉である。paritta 儀礼とは、この paritta の詠唱を中心とする仏教儀礼のことであり、テラワーダ仏教社会におけるもっとも一般的な儀礼として行なわれているものである。paritta は、さまざまな gatha や、sutta から構成されるものであるが、その第一義は唱えること（set）にある。唱えることとそれを聴くことに paritta の意味があるのであるが、その意味とは、一種の「呪術的」効果にあるということができる。

この効果とは、文字通り人（生者と死者）を悪霊や災いから守り、不幸を遂い払い、あらゆる苦難から保護し、安寧や繁栄をもたらすといったものである。この点で、呪術的といったのであるが、タイやスリランカの仏僧がこの儀礼を行なうに際して説明する教義上の説明は次のようなものである。

すなわち、paritta を誦え、それを聴くことによって pinkama をなすという儀礼行為は仏教史の初期に出現したものであり、スリランカではアヌラダプーラ期にはすでに pirit の儀礼が盛大に行なわれていたという記録があるし、タイでもスコータイ期には行なわれていた。仏教の基本的思考に、精神－知の鍛練が存在の一切を決定するという考え方がある。物質的条件はすべて精神－知の状態によって左右される。paritta の詠唱は、ブツ

ダの言葉—教え（dhamma）を導きとして精神と知の鍛練を行なってゆく者にとって、精神の統一を可能にし、知の向上をもたらすものである。dhammaとは真理であり、parittaはその真理に達した者の言葉の詠唱に他ならない。この詠唱はそれ自体に精神の安寧をもたらす効果がある。それを唱える行為とともにそれを聴く行為も同等の重要性をもつものと考えられている。この精神の安寧は人間の内的な充実を生み出すだけでなく、外的な効果もあたえる。それは病気を治し、災いを除く。ブッダ自身もこれを実行し、弟子にもそれを命じた。病気のときにparittaを誦えよ、自ら出来ないときには他人に誦えてもらえ。しかし、parittaを誦えることは本質的に自己に対してである。ブッダやアラハンは自分に対して、自分の修行目的の遂行のためにこれを行なう。しかし、他者のためにこれを行なうことも認めている。とくに病気のときに他人が誦えるparittaを聴くことは、精神が弱まると、災いをよぶことがそれだけ多くなるからparittaを聴くことによって精神の集中が可能となり、それが肉体的な状態に影響をあたえるのである。精神の状態が身体の健康と安全を左右する。純粋に身体上の病気というものは存在しない。良い精神の状態と悪い状態とが存在するだけである。

この二つの状態は、カールマの状態と結びついている。悪い状態はカールマの悪さを意味する（Akusala Kamma－vipaka）。parittaの詠唱は、いわゆるSacca Kiriya、守護・正当性・達成の真理に依存することの表明なのであり、その表明の形式なのであって、その形式を守ることに意義がある。すなわち、真理の力は真理に従う者を護る（Dhammo Have Rakkati Dhammacarim）とは、parittaを誦える行為の前提である。ブッダによれば、正しい努力は苦しみ（Dukkha）を克服するための不可決の行為（Viriyena Dukkham Accheti）なのであって、parittaを誦え聴くことはこの正しい努力（Viriyena）の一つに他ならない。これがもっとも一般的なpinkamaの行為として流布され人々の支持を受けたのには、その形式の簡明ということにもよると思われるが、parittaの詠唱を聴くことによって、病いを治しまた防ぐことが可能となり、しかも病いこそすべての不幸と災いの原因であり、Dhammaの詠唱による表現であるparittaを正しい形式によって聴くことは、生きる上での不可決の重要な行為となる。

大体、現在では僧の一般的な表面上の説明は、どこで聴いてもこのような内容となる（Sri Dhammananda を参照）。テラワーダ仏教の僧の特徴に外へ出て俗人の救済をすることよりも自己の修行目的を優先させるという点があり、自己本願というよりも自己のカンマは自己だけが改善出来るという厳しい認識があって、マハャーナ僧の他力本願的態度と著しい対照をなしているが、parittaはほとんど唯一の衆生への救済をあたえる機会である。paritta儀礼が文字通り「詠唱」だけといってよい儀礼内容から成ることは、テラワーダのサンガが本来ブッダの言葉の貯蔵庫としてそれを守り後代へと伝えてゆく「語りべ」集団であったという事実と関係するものと思われる。解釈や注解をさしはさむことよりもブッダの教え(Dhamma)を忠実に語り伝えてゆくことが第一義的な義務とされ、パーリ語が「無文字」言語であるということからもそれは絶対的な要請となった。verbalなspeech actがすべてに優先されるのは、それに由来すると

いってよいであろう。この特徴は今日のサンガをも大きく支配しているのである。

先に紹介したテラワーダ僧のparittaの説明は、決して誤りではないが、かなりこじつけ的な説明であって、事実上、parittaに対するCannonicalな根拠はほとんど無いといってよいのである。Buddhagamaya、つまり仏教と儀礼とは聖典上はかかわりがない。仏教は、世俗の生活の安寧にも関係するが、それはブッダ自身に請願するのではなくて、聖典の使用を通してブッダの言葉（Buddhavacane）に実践によって行なわれるのである。徹底的に言葉の詠唱による「語り」が重要視されているのである。しかも、こうした聖典の使用は、ゴムブリッヂが指摘するように、「呪文spell」として用いられているとみることもできよう。だが、こう断定するのにはまだ問題は残るように思われる。

parittaのsuttaは聖典に準拠するが、今日スリランカで用いられているテキストは、10世紀に作られたといわれているCatubhana-varaを典拠としている。

参考文献

青木　保
「テラワーダ仏教の人類学的研究――問題と展望」東南アジアの宗教と芸術　シンポジウム報告、国立民族学博物館　1978

AOKI, T
Select Bibliography on Anthropology of Buddhism, Osaka　1978

Gombrich. R.
Precept ana Practice――Traditional Buddhism in the Rural High Land of Ceylon, Oxford, 1971.

Mahamakut Rajavidyalaya
Pali Chanting with translation, Bangkok, 1974

Sri Dhammananda
Handbook of Buddhists, Kuala Lumpur, 1978

Yalman, N.
"The structure of Sinhalese Healing Rituals, Journal of Asian Studies, June, 1964